

書評

R. L. Curry, Jr./L. L. Wade, A Theory of Political Exchange, Prentice-Hall, Inc., 1968. Pp. 130

齋藤 正

(一)

経済政策の実践的性格を貫くためには、完全競争原理にもとづく純粹経済理論にとどまることはできない。収獲増、外部経済効果、集合消費を考慮しなければならないからである。一九六〇年代の高度成長に伴い計量経済学的思考に基づく理論展開がはなばなくなされている一方で、新しい政治経済学が反省されている。政策に支配原理が必要であり支配・勢力原理はとくに政治学の領域の問題であり、さらに集合的消費、公共財よりの社会効用については社会学の財産である集団理論が政策に取り入れられねばならないからである。ここで経済学者は政治学者、社会学者と共通の社会科学という領域で共同の次元に立たねばならないのである。従

来、政治経済学、社会経済学の思考体系が存していたのは、政策が厚生の実際のインプリケーションを持つ当然の姿であった。ここに紹介する書は経済学者 Curry と政治学者 Wade の共同労作になる創造的なもので、経済学的方法論を政治学の研究方法に適用する可能性を示唆したもので、新しい政治経済学というより、経済政治学を提起したという意味で一読に値するものと考え、ここに紹介するのである。とくに私が興味をもつ経済的勢力と民主化の關係の経済学理論の中での調和を考えていた折であり、この意味から本書に接近することも一方法と思われる。この傾向の書物として最近 W. F. Ilchman and N. T. Uphoff, The Political Economy of change Pp. 316 (1969. University of California Press) が発刊され、経済と政治と社会の綜合化への新しい学問の方向がみられる。

(二)

や)本書は David Easton 編集の Contemporary Political Theory Series の中の一巻で、政治的交換を問題としている。政治的交換とは理論としても概念としても、政治学者が政治学を考える場合の中心的方向の一つであるとしている。(序文)著者達が設定する仕事は限られたものであり、交換概念を種々に活用する事で他の多くの研究者の研究を余り追跡することもせず概念に内在する多くの問題を論ずることとはしない。著者達が試みていることは近代政治分析におけ

る次の四つの中心的理論的命題である。

まず第一に問題とすることは政治的に国民間で相互に利益ありと見られるものとの交換を取扱っており、たとえば二人の存在は政治的目標としての政治的「売手」は高い「価格」を求め、政治的「買手」は低い価格を求めているがごとく相対立している、しかし両者の交換は両者が関係する限り「より望ましい」状態に両者をおくこととなる。(第一章)この場合勢力的考え方を導入することによって相互に有利な交換に対する潜在性を明らかにするのである。ここではある交換における一層勢力ある人はより良い交換に達するであろうし、しかし勢力は以前にあった地位よりあるパーティーを悪くするように分配されることを否定していない。本書ではこのケースは交換の任意的な事象でなくて、ある意志をもった強制的事象である。政治的に軽視され所有権を奪われた人々は政治から選挙権(自由)を奪われるもので、その人の運命は完全に他人の手に渡っている。この点はとくに経済学において競争行為が民主的な対等勢力の他に現実的にライバリーの性格をコインの裏に持っている点に注意する人々の助けとなる。

第二の問題は大きな政治的交換領域、経済でいわゆる「市場」と考えるものを記述することにある。これは第二章で取扱われており、いわゆる一般の均衡論である。すなわち市場に参加する財産及ポリシーメーカーキングの方法などの一定の政

治に対し事業家がその政治的構造(市場)をつくるため相互作用をするものを詳細に記述する。第三章では経済学での部分的均衡論にあたり特殊な市場すなわち、官僚的支配を分析して如何なる方法論が用いられうるかまたこの市場で交換が如何に作用するかを示している。

第三の問題は政治市場構造における勢力の作用を一層詳しく分析することで、これは第四章にあり、勢力を市場構造の最も主要な特性と考えていることである、勢力は他人が選択の自由を持つている代替物を取り除きそして他人が自由の選択をすることを妨げんとする能力である。勢力が結果するものは交換を強制する勢力ある人の能力である。本書では、政治的市場が一層競争的であれば、あるいはそのデジモンメーカーキングシステムが一層分散化されるほど、社会的効率、政治的自由、社会的平等の目標は容易に達し得られやすくなるとする、いわゆる経済的最適資源配分の条件導出のプロセスと一致する。

第四の命題は政治的産出物の優先権が順位づけられる政治的投入が組織化され政治的産出物に交換せられるプロセスを考慮することである。第四章、第五章で競争的政治市場構造でなく不完全政治市場構造を取り扱っている経済の不完全競争理論にあたる。その他の政治的資源の不平等分配を考慮するためであって要約すれば本書の求めるものは、就中政治的資源としての投入が政策としての産出となるプロセスの体

系的考慮や、いかにして政策がこれらの資源の保持に割当てられるかということの説明にある。ある政治的活動家の見地からみて、そしてこのことは何故その活動家が著者の主張に一致するか明らかなるが本書の分析では政治的資源市場への政治的「後退」と政策的市場への「前進」を分析している。すなわち、これらの活動家の市場行動は政治を組織化し困乱を和げる。第二に分析していることは活動家が資源と政策市場に影響を与える交換のチームで、これらのある活動家により所有されている勢力の機能を分析する。すなわち本書では、行動から誰が利益をうけるかの問題を取り扱う、特に第五章で。

第六章はこの本書の結論で政治的交換の形式によって示された将来の問題についての若干の解釈を与えている。著者はこの論文で経済理論から引き出したある理論体を用い政治学者にはこのような接近は有益であり、強力であると考えているが、この接近は本書の目的にとって第二義的なものであるとしている。すなわち交換の考え方は経済理論によっている。これは政治的分折へのいろいろの接近のわくの中で同様に適用される。たとえば一般組織分析、コミュニケーション理論、ゲームの理論、集団理論多くの大衆社会理論などすべてはある交換の考え方を持っている。すべての政治秩序の形成の中で人々はみずから得る為に他の人に物を与える。この事こそ本書で理解しようとしているプロセスである。

書評

本書で経済的分折を用いることについて説明を要する。すなわち、行動科学における組織理論の発展に通じている人はよく知っているように、経済学の研究に他の社会理論でふれてないすぐれたものを含んでいる。本書は経済学の発展が不幸にも多くの社会科学者に親しまれない方法で理論を展開していた事を指適し、たとえばケインズ卿の言うように「経済学はきめられたある結論を作るものではない……経済学は心の道具であり思考の技術であり、これは正しい結論を出すとき、経済学の所有者に役立つ」という引用で説明する。

「経済的」分析は実際社会分折のまさに一つの方法であり、人間活動の他の領域にも等しく適用しうるものである。ある政治的問題をとり扱う際に用いられる「比喩」ではない経済的分折こそは研究の基本的的方法論的技術である。

政治学を経済理論の見地からためすにはある努力が必要である。この書は経済理論及び方法論になれない社会政治理論の研究者に間接的な経済理論から得た政治学公理で教えるようにするのである。どのような経済学の公式もこの本を読むには必要でないが役立つ事は確かである。従って本書では経済理論、方法論、図式的分析を用い経済理論的思考の基本的豊かさを明らかにしようとするのである。したがって経済理論の研究者に対して本書は経済学を教えるようにするのはなく、ただ分析の道具と方法的接近の使用に対する広い基礎を与えようとするのである。この点とくに第一章より第五章ま

書 評

での市場を通しての交換分析方法はあたかも経済学書の入門を読むがごとき感を与える。経済分析の新しい機軸は用いられていない。それについては後に著者は理由をのべている。

(三)

交換理論は政治分析における若干の命題に関連をもっているので本書の核心である「交換」と「政治的諸問題」について考えねばならない第一章から五章までの説明で、経済的観点からの交換概念の理論的科学的価値について強調し、政治的交換概念が如何にして理解され如何にして政治的交換のプロセスと構造概念を考えるかをのべている。かかる接近の正当性は、経済的政治的研究並に理論は個人及集団行動の社会心理学的相関をもった前提からそのタームでの完全な意味で相互行動と一層調和した関係へ動く試みから利益を得ることができるとし、利益を得ねばならないという確信から発する。

本書では政治的交換への一つの接近から得られた視角及前提を明らかにしその接近からなっている思考、モード、概念を推進せんとする努力が試みられている。すなわち、現存世界において政治的交換が働らく方法を見出し、一層正確にいわれる実質的な政治的交換が存するかを見つけ、どの程度政治の面に基本的なものか、政治市場にあるものは誰か、社会における価値と費用の分配に対し如何なる結果をもつかを見つける政治研究を考慮している。交換理論が重要であるのは事実、社会的相互作用に注意を向け、又その厳格さ、結合力

の故に重要である。これは論理的構造およびインプリケーションで明らかなるものである。

政治学における研究問題に関して著者は「変換」過程について政治的資源としての投入から公共政策への転換の方法に焦点を合わせているが、従来もパースンズ、イーストン、アーモンド、ミッチェルなどの多彩なこの方面の研究労作があり、とくにシステム分析見地から見ている。本書で政治に対する需要の可動性、政治資源の分配、産出量の優位性の順位、政策決定方法、現存構造におけるかかる決定の動因、勢力の問題などに注意を喚起することは他に見られぬ独創性を持っている。これらの過程に含まれている最も特長ある役割を描き政治的プロセスの理解に対するデジジョンメイキングの重要性を示している。交換と同様に政治経済が最大の貢献をなしているのはプロセス分析である。この分析は政治システムの投入、産出限界の両方に存在するより広範な社会からの「後転」「前転」を説き、この考え方はまさに政治が経済と社会の中間項としての従来の理解に相通ずるものと了解できる。

(四)

さて経済理論について本書が問う重要な問題は次のごとくである。「政治的資源はいかにして分配されるか、政治的資源はいかに、誰によって組織づけられるか、需要優先権は政治の中でどのように順位づけられるかまたその順位づけは政

策に変換される方法如何。政策決定がいかなる結果をもたらすかさらに政治における嗜好と選好の分配とは何か、最後に政治のデジジョンメーキング法則、その政治的交換市場の構造とは何かというごとく、これに解答を与えるには、多くの経験的調査の再組織が必要であり、さらに重要なミクロ的政治構造の実質的作用の研究が必要であるとする。かかる構造は斉合、分類、交換のタームでのプロセス、すなわち政治的活動と成果は相互作用の見地から分析され、調査の結果は交換の理論的説明に反影させる。かかる調査は新しい活動仮設をつくるが最後に理論的経験的政治学の中に経済学のモデルを適応させる必要を考慮している。

著者は政治的交換理論に直面する若干の問題を故意にさけているのは、それが重要でないからでなくて、今後自分達の意見を発展させる段階に生ずる欠陥を指適するより、先づ自分達の考え方の底に潜むものに焦点をあてることに力点を置いている。この接近は理論設定の初期の段階では合理的なことである。しかも交換理論は社会システムが分ち与えられた信念、価値、結果として考えられている現代社会理論から出発している。

「世論」および交換理論は異なる見地から同じ現象を説明するものである。集団行為は特殊なシンボルおよび社会的環境に反応する人々をつくる文化の「非合理的」プロセスから生ずるもので、たとえば Blau はこれらの種類の行為を交換概

念から除外している。交換概念は合理的個人の行為に焦点を合わせている。ホーマンズは社会的交換理論の中の「非合理的」社会的相互行為を含む。本書はホーマンズに従がっている。非合理的政治理念が個人、集団階級の自己の利益といかにして一致するかを証言することは強調されねばならない。もちろん「合理性」という語を用いることは人間が所有していない能力にもとづくものだというのではない。合理性への認識力のある制限は存するのである。デジジョンメーキングは集合的包括的であるよりは拡張的である。しかしこれらの条件の下で政治的交換が生じ、人々は選択を行ない、その人々の決定は自己利益のためである。以上のすべてのことは理論的に了解するべきことであり、経済的変化の交換理論はかかる理解の一つの方法でなければならぬ。恐らく第二の政治に應用されるとき経済的交換理論の批判の多くのものは、かかる理論が政治における勢力の役割を否定するということである。このことは勢力は少なくとも二つの派の集団を含む非対照的なものに關係しているが勢力は定義によつては交換のタームで認められ得ないといわれている。交換は勢力關係で起らないからである。勝者と敗者が存するに過ぎず、便益と損失の両者の分配は存しない。「勢力の中の勢力」を分析概念として取り上げずとも、かかる見解は経済理論の不適切な評価と交換關係の経済的表現から得られることは明らかである。勢力はふつう多くの政治的交換關係にて観察しう

ると定義される。このことはとくに第四章 Exchange Conditions in Political Market Structure と第五章の Exchange and Political Entrepreneurs でのべられている。市場構造の全体概念はいかなる交換に対しても、成員間に存する勢力の程度を正確に決定するようになっている。

本書で最初に指適していることはこの関係の本質についてであり、事実、ある政治的交換における「自由度」は科学的政治理論と同様に規範的命題を導入することである。自由交換過程にける勢力と自由の問題を高めることは、デモクラシーと競争性の問題に帰する。もちろん競争的経済システムは競争的政治システムと西欧で共に発生したのは偶然ではない。十九世紀、二十世紀初頭は、経済ならびに政治における競争の合理的高い水準で特長づけられていた。市場ならびに政治的領域にあっては小さくもイデオロギー的にまた修辭的にすべての人によって参入の道が開かれていたのである。経済学、政治学へのこの接近はみせかけな、ある点まで保証されながら政治的経済的勢力は大多数の人々の中に広がって行った。もちろん経済学では、自由企業イデオロギーは、スミス、リカード、マルサスのような自由主義者が経済的プロセスを説明し合理化し、政治学ではロック、ジェファソン、ミルなどが政治的勢力の分散を説明し、合理化せんとしていたのである。政治経済の両面での勢力は国王の権威、階級の権威から個人の権威へのシフトとして考えられていたのであ

る。政治システムでは平等は普遍的根拠地として設定され、経済学にあっては競争市場がすべての参加者に対して経済資源にもとづくものを割当てることにあった。

これらの立場にある理論家は、彼等の見解に完全に満足していたという訳でなく、現実には彼等の著書にのべている希望に対応する範囲は純粹ではない。しかし勢力は分散され、競争は種々の明らかな方法で示されていた。競争的政治学、経済学は事務所、法廷とも、いづれもデモクラシーを作り出すと考えられた。社会政策は特権階級の利益に反影せず、消費者、市民の全体的意向に反影した。消費者は財、用役に対して自由市場で合理的に投票し、市民は公共政策に投票所で自由に投票する。この説明は経済的政治的社會の適当な説明ではないが、デモクラシーの規範的理論の一つを与えているのである。

本書での政治的交換の理論は伝統的ないみで発達しうる競争の存在を想定するものでないが、しかし人々は政治的資源が広く公正に分布され、政治的市場が個々の市民の欲求、需要利益に競争的に反応的に開放されている政治を好むものである。経済におけると同じく、競争的政治市場の名残が存しているが、政治的デジジョンメーカーキングの決定的中心は相対的に集中化され、多少とも殆んど少数人数に限られている。人は正確に、政治システムは個々の市民により自発的につくられる需要に応じるかを知らたいであらう。丁度ブルジョア、

デモクラシーと自由放任主義が歴史的に共に発展したごとく、独占資本主義と独占的政治的エリートがいまや発生しているがごとくである。

(五)

本書では交換理論または新しい政治経済の規範的インプリケーションを論じていないが、政治的構造とプロセスの斉合、分類の科学的研究に加えて政治的交換理論は、重要な規範的インプリケーションを有するのである。交換理論は明らかにデモクラシーの経済理論に貢献する。

政治的交換の経済理論は開放的民主的競争的政治の要求を経済的に刺戟する可能性をもっており、人はかかる状態へ社会が接近するか離れてゆくかの範囲を測定する基準を与えるものである。

最近競争原理を経済学で末だ金科玉条とするものが多く、市場はもちろん売手と買手の間のデモクラシーの理想実現の場として分析の中軸であつてよい。しかし競争の表側はデモクラシーであると同時に裏側は相手をたおして支配せんとする勢力が刻印されていることを忘れてはならず、経済学と社会学の間に政治学が存するという理念を確認するためにも本書の政治的勢力の経済的取り扱いの新らしい思考方法は反省するに無駄ではないと思われる。

最後に各章の題目を付記しておく。

第一章 経済的及び政治的分折における交換

書 評

第二章 一般政治的均衡における交換

第三章 部分均衡における交換、支配的エリートの市場

第四章 政治市場構造における交換条件

第五章 交換と政治的企業家

第六章 交換と政治問題